



「筋のない話B」 1974 180×180

特別展 **秋山泰計の版画**

1989年12月19日[火]——1990年2月4日[日]

休 館 日=12月25日月・26日火・29日金～1月3日水・8日月・16日火・17日水・22日月・29日月  
開館時間=午前9時～午後5時(入館は4時30分まで)

入 場 料=一般個人 200(160円) 小・中学生 100(80円) ※ ( )内は20人以上の団体割引料金

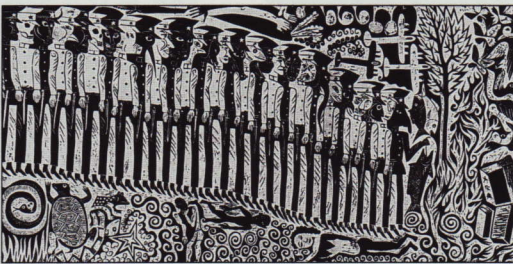
**渋谷区立松濤美術館**

渋谷区松濤2-14-14 TEL.465-9421 渋谷駅下車徒歩15分 神泉駅下車徒歩5分

■講 演 会 平成2年1月13日(土)午後2時～ 「多面の才能—秋山泰計」 田口安男氏(東京芸術大学教授)



「母子像」1963 95×55



「夢の旅I 群鳥」1985 92×182

秋山泰計は昭和2年(1927)高松に生まれ、昭和61年同地で没した版画家です。かれは「おびからくり」などの奇抜な紙造形を数々発案した、ユニークなデザイナーとして著名ですが、東京芸術大学で漆工芸と彫刻を習得し、それぞれに際立った才能をみせるというように、きわめて多才で好奇心の旺盛な作家でした。

昭和31年芸術を捨てるかのように率然とブラジルに渡りますが、創作意欲やみがたく、この地で始めた版画制作は結局かれの一生の仕事となりました。

秋山泰計の版画は木版画が主要なものです。作風上前期と後期に大きく分けられます。前期はブラジル滞在中から始められ昭和41年頃、作者40歳頃までの、リアリスティックともヒューマンスティックとも評されるような版画群で代表されます。重量感溢れる人物像や熱気に満ちた風景画は、若い作者の情熱と苦悩を反映して表現主義的であり、描く対象のリアリティに作者の感情を盛り込もうと努める姿勢が見られます。ところが、後期に移行するにしたがって、画面は観念的・装飾的となり、ユーモラスで諧謔的な作風になります。表面に打ち出されていた作者の感情は次第に画面の後ろに隠されていき、事象を抽象し戯画化する醒めた眼が制作に支配的になりました。といて、作者の心情や姿勢が冷めてしまったり消極的になったわけではありません。人間や動物、生きとし生けるものすべてが渾然と、ほとんど無規律にひしめきあうような画面をもつ晩年の作品群には、社会や人生の激流に呑み込まれつつもその中で懸命にもがく人間の姿—それは時に滑稽でありまた哀しくもある—が、辛辣ではあるが同時に暖かいまなざしをもって描かれているのです。

このような秋山の画業をふりかえってみると、かれが終始一貫して“人間”を正視し表現し続けたことに気づかされます。また秋山はその刀の切れの冴えのごとくに俗事には無欲で潔癖な人物でしたが、とくにかれの小品からは事物の観照における繊細さや情味が感じ取れ、かれの暖かい人柄がよく示されています。

本展では、秋山泰計の木版画のうち主要作すべてを含む71点のほかフロタージュや染色作品など総数80余点を展覧し、ユニークな芸術家の軌跡を展覧しようとするものです。

## 講演会

- 平成2年1月13日(土) 午後2時～  
「多面の才能—秋山泰計」  
田口安男氏(東京芸術大学教授)

## 映画会

- 平成2年1月14日(日) 午後2時～  
「伝『画家の技法』美術 1.複製画について」  
「伝『印象主義と後期印象主義』美術 2.複製画について」
- 平成2年1月21日(日) 午後2時～  
「伝『複製画と現代の複製術』3.複製について」  
「伝『キュビズムとモダニズム』美術 4.複製について」  
「未来派」

## 美術相談

- 平成元年12月3日(日) 午後1時～4時  
相談員 磯村敏之氏(洋画) 畑農照雄氏(版画)
- 平成2年1月28日(日) 午後1時～4時  
相談員 西嶋俊親氏(洋画) 荒井朝吉氏(日本画)

